

第6回「大分ユーモアまんが大賞」最終審査会

日時：平成28年1月22日(金) 午後4時15分より

会場：別府大学 別府キャンパス 4号館4階 PC4教室



【審査員コメント】

○飯沼賢司（別府大学文学部長）



今回初めて審査員をさせていただきましたが、審査をするにあたって作品の評価が難しいと感じました。四コマ・ストーリー部門は、ストーリーの流れを重視して審査したつもりでしたが、絵の表現方法などにも視点を向けて評価する必要があると思いました。来年に向けてもう少し勉強していきたいですね。

○吉田 寛（ユーモアコピーライター）



相変わらず世間はお笑いブームですが、紙媒体の漫画では赤塚不二夫先生のようなゲラゲラ笑う作品は少なくなっている気がします。しかし、ユーモアという観点では今回の大賞作品は絵も素晴らしく、タイトルを逆に読むと「コトハジメ」みたいな《仕掛け》が随所に隠されていて良かったと思います。ただ最終選考に大分県からの選出者がいなかったのは残念。

○岩豪友樹子（歌舞伎・舞台脚本家）



今回の四コマ・ストーリー部門は個性が際立っていましたねえ。それぞれの輝きがあるというか。ですので、事前審査でも悩むことが少なく、採点がしやすかったです。ただ一コマ作品の物足りなさを感じましたね。時事問題等を取り上げた作品で「なるほど」と感じさせられるものもありましたが、一コマ作品の今後の気がになりますね。

○ジ・アッチィー（プロレスラー・「大分プロレス」代表）



今回は、一般的な会話の中でのちょっとしたユーモアを感じさせる作品が多かったですね。それはそれで大衆ウケするんでしょうが…。四コマ作品が大多数でしたが、個人的にはストーリー性のあるマンガが好きなので、来年はひねりを効かせる中にユーモアを感じさせるようなストーリー作品が出てくることに期待したいです。

○甲元 隆則（別府大学講師 アニメーション担当）



今回の審査は事前の採点の段階で大賞の作品が決まっていたような気がします。しかし四コマ・ストーリー部門も一コマ部門も審査委員の評価がばらけて、感じ方も人それぞれと思いました。しかし、一コマ部門の衰退には寂しさを感じます。また年々デジタルでの作画が増えていて…、悪くはないんですが、アナログでの良作を期待したいですね。

○田代しんたろう（別府大学教授 マンガ担当）



一コマ漫画に危機感を感じます。《ユーモアを感じさせる一枚絵》と広くとらえる見方をアピールして、なんとかこの分野を残していきたいと思います。四コマ・ストーリー部門は個性が際立ち、充実していました。相澤 拓さんは二度目の大賞受賞ですが、気合十分な作品を応募してくださいました。すべての応募者の皆様に感謝です。